

生徒の目が輝く！ アクティブ・ラーニングの 考えを取り入れた授業(3)

授業レポート CLASS REPORT

—ALTを活用した授業の工夫—

枝迫 香菜 Edasako Kana (鹿児島県奄美市立名瀬中学校)

1. はじめに

本校では、「英語の授業に関するアンケート」を定期的に実施しています。1学期末のアンケートでは、授業で最も印象に残った活動について回答させたところ、ALTと行った活動や、アメリカからの留学生を招いて行った授業をあげる生徒が多数いました。

理由としては、「自分の英語が相手に通じるとわかってとてもうれしかった」「相手の好きな歌手が自分と同じで盛り上がった」「言いたいことがたくさんあるのにうまく話せず、もっと勉強しようと思った」などがあげられました。

このように、オーセンティックなコミュニケーションは、生徒の意欲や英語学習の効果を高めるために必要不可欠なものです。今回は、このようなALTを活用した授業をよりアクティブにするために行った授業実践について紹介します。

2. 活動の設定

本実践は、2年生のLesson 4 USE Writeをアレンジして行いました。まずは、次のようにタスクを設定し、活動内容をアレンジしました。

[タスク]

旅行代理店の社員になって、
ALTに日本各地の観光地を紹介しよう！

先に述べたように、生徒の活動への意欲を高めるためには、ALTを活用することが効果的です。さらに、本校のALTは本市に赴任してから1年以上が経過しており、日本各地を旅してみたいと話していたことからこのようなタスクを設定しました。

また、生徒の意欲をさらに高められるように、活動について次のような補足説明を行いました。

[活動内容に対する補足説明]

- ① 全員が異なる県を担当します。
- ② 授業の最後に、ALTが本当に行きたいと思った県を3つだけ発表してもらいます。

①のようにした理由は、まず、生徒一人ひとりに責任を持たせるためです。それぞれが異なる県を担当することで、必然的にパンフレットや発表原稿の内容が異なるものとなります。そのため、生徒一人ひとりが活動に責任をもって取り組み、思考もよりアクティブな状態に保てると考えました。また、さまざまな県について調べることは、日本のよさを知るといふ点からも有益であると考えました。

②のようにした理由は、生徒に「よりよいプレゼンテーションをしたい」という意欲を持たせるためです。また、英語の力だけでなく、アイデアがよかったか、ALTの好みを考えながらプレゼンテーションができたか、など、多面的に評価することで、英語が苦手な生徒にとっても魅力的な課題になると考えました。

3. 授業の実際

(1) 第1時

第1時はパソコン室を利用して行いました。まず、教師が作成したパンフレットの例を用いながらタスクを確認し、鹿児島県を除く46都道府県が書かれたくじを一人ずつ引かせました。その後、担当する県の観光情報を集めるため、インターネットを利用した調べ学習を行わせました。

生徒の調べ学習の様子を見ている



調べ学習の様子

と、その県の位置や観光地に関する情報、ご当地キャラや名物などを調べる生徒が多く見られました。また、「ALTの先生は、旅先でどんなことをするのが好きか」「食べ物の好みはどうか」などをたずねてくる生徒もおり、紹介相手としてのALTを意識していることが感じられました。

(2) 第2時

第2時には、第1時に調べた内容をもとに、パンフレット作りや発表原稿を書く活動を行わせました。その際、教科書を参考にしながら、観光地の紹介に役立つ表現について確認しました。また、一人につき1冊の英和・和英辞典を持たせて活動させました。

〔観光地紹介に役立つ表現〕

- ・ There is a great aquarium in Okinawa.
- ・ You can meet the local people at the festival.
- ・ Please taste the local food there.
- ・ Try tasting local food.
- ・ Do you like sushi?
- ・ Do you know kakinoha-zushi?

生徒の様子としては、紹介内容がそれぞれに異なるため、自分の作品作りに没頭する姿が多数見られました。一方で、なかなか筆が進まない生徒に対しては、教師が机間指導を行いながら、内容や表現方法等をアドバイスしました。

(3) 第3時

第3時には、作品の中間発表と推敲を予定していました。しかし、授業開始の時点では、作品を作り終えた生徒と、そうでない生徒との差があったため、次のように活動の指示をしました。

〔活動の指示〕

- 前半30分は、パンフレットと発表原稿作りの続きを行います。
- 表現の仕方が分からずに困っている人は、終わっている人からアドバイスをもらいなさい。
- アドバイスする人は、「自分は○○のように書いたから、この表現を使ってみたらどうかな。」と言ったように、ヒントだけを伝え、相手が自力で英文を書けるように工夫しなさい。

授業開始時点で作品が完成していた生徒は、教室

内を移動しながら積極的にアドバイスを行っていました。アドバイスの内容としては、例えば、次のようなものがありました。

〔アドバイスの様子〕

- A: 「青森では、ねぶた祭りが行われる。」って書きたいんだけど、「行われる」がわからない。
- B: 僕は、「日曜日に朝市が行われる。」って書きたくて、” You can enjoy Morning Market on Sundays.” って書いたよ。
- A: なるほど… You can enjoy Nebuta Festival in Aomori.” で伝わるかな？
- B: 大丈夫だと思う！

このように、それぞれが紹介する内容は異なっても、「観光地紹介」という大きなテーマが共通するため、生徒同士での協同学習がよく機能していると感じ



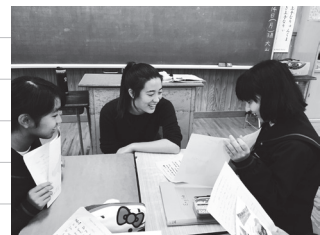
協同学習の様子

(4) 第4時

第4時には、実際にALTに対して観光地を紹介する授業を行いました。ALTとの距離を近づけるため、発表はグループ内で行い、発表しているグループ以外のグループには、プレゼンテーションの練習や自己評価を行わせました。

前時の中間発表では、「声の大きさ、目線、パンフレットの示し方」などを互いに評価させていたため、それらに気をつけながら発表する姿が見られました。

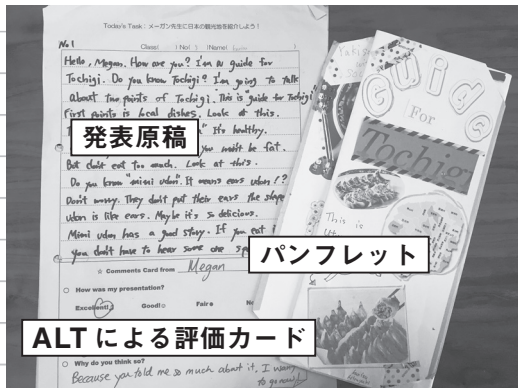
最後に、ALTが本当に行きたいと思った県を“ I really want to go to ... Iwate!” のように3つ発表してもらいました。選ばれた生徒は「やったー！」と声をあげて喜び、他の生徒からも拍手が送られるなど、生徒の達成感が最も感じられる場面でした。



ALTへの発表の様子

(5) 授業後のフィードバック

授業後には、パンフレットと発表原稿を回収し、ALTに評価カードを記入してもらいました。



ALTによる評価カード

[ALTによる評価カードの内容]

- ・ How was my presentation?
(Excellent!) Good Fair Not good
- ・ Do you want to go there?
(Yes!!) So-so No
- ・ Why do you think so?
Because you told me so much about it.
I want to go now!

この評価カードを書いてもらうことによって、一人ひとりに細やかなフィードバックを行うことができると同時に、ベスト3に選ばれなかった生徒にも十分な達成感を感じさせることができました。

4. 授業をよりアクティブにするための工夫

本実践を通して、ALTを活用した授業をよりアクティブにするためには、次のようなことが大切であると感じました。

(1) タスクの工夫

タスクを設定する際には、単に発表の相手をALTとするだけでなく、よりオーセンティックなコミュニケーションとなるよう工夫が必要です。例えば、ALTが日本に来てどのくらいの期間が過ぎているのか、どのようなことが好きなのか、といったALT個人についての情報をタスク設定に生かすことで、実際にALTに役立つ情報を伝えたいという気持ちが高まります。

(2) 活動形態の工夫

このような活動では、グループやペア活動を取り入れることが多くあります。その際気をつけなくてはならないのが、「個の責任」と「グループ・ペアでの協力」のバランスです。今回は、同じテーマでありながら別々の県を担当させることで、「個」として自分の担当する県に責任を持ち、「ペア」で表現方法を共有することができました。このように活動形態を工夫することで、英語が得意な生徒もあまり得意でない生徒も、自分自身の作品を、他と協力しながら作り上げることができます。

(3) 評価の工夫

活動後の評価においても、ALTをうまく活用することが大切です。今回は、発表後に「本当に行っていたと思った県」をALTに発表してもらうことになっていたのですが、生徒達は英語の正確さだけでなく、プレゼンテーション全体のできを意識して発表していました。また、英語があまり得意でない生徒に対しても、「自分でも工夫すれば選ばれるかもしれない」といった見通しをもたせ、意欲を高めることができます。また、ALTに評価カードを記入してもらうことで、一人ひとりの生徒が自分の発表を充実感をもって振り返ることができていました。

5. おわりに

「アクティブ・ラーニング」と聞くと、何だか難しそうで、準備も大変そう、というイメージがあるかもしれませんが、実際に授業実践を行ってみると、ほんの少しの工夫でこれまでの授業に取り入れることのできる考え方のなだと感じます。

大切なことは、「いかに生徒の思考をアクティブな状態に保つか」を教師が常に意識するということです。この視点をもつことによって、「活動が停滞している生徒がいる」「早く終わって手持ちぶさたな生徒がいる」「説明ばかりで飽きているかもしれない」といったことに気づくことができます。このような気づきを生かして行われる授業こそが、「アクティブ・ラーニング」の考えを取り入れた授業なのだと私は考えています。